

解放後、韓国知識人の歩み—安秉直氏に聞く（下）

今 西 一

4. 50年代の話

4.1 50年代前期（朝鮮戦争期）

① 戦争と村

今西 ちょっと朝鮮戦争に入る前に、戦争前の李承晩時代^{イスンマン}というのは、社会が非常に混乱するでしょ。統治のやり方に対して、激しい対立とか運動が起こりますが、村の方ではあんまりなかったですか。それと、それを釜山で経験されたことはないですか。

安 どうでしょうかね。当時色んな政治派閥の間で争ったみたいだけど、その影響がね、農村まではあんまり来なかったんですね。それと李承晩というのは、圧倒的な人気を持ってたんですから。李承晩に比較だとか、競争できる政治家というのが当時はね、あんまりいなかったんじゃないかな、という感じがしますね。ただ、農村では左右間の戦いは激しいものがありました。

今西 先生はその後、朝鮮戦争を経験されたわけですよ。その時は、釜山におられたんですか。

安 いや、私、村にいたんです。釜山でね、そこで海軍少年団が解散しちゃったんですから、郷里に戻ったんです。そこでも戦線が、だんだん南に向かって。

今西 ソウル市内は、3日ぐらいで占領されてしまいますよね。

安 私の郷里まで、戦線がね、下りてくるのには、1ヶ月半くらいかかったと

思いますね。

今西 1ヶ月くらいして軍隊が来たんですか。

安 1ヶ月半くらいして、全羅道チヨルラの方を回って晋州チンジュ、私の郷里に来るんだけど、私の故郷は馬山マサンと近いんです。馬山とは約10kmくらいあるかな。馬山には海軍の軍港があつて。私の郷里から馬山を経由してね、そこに鎮海ジンネという所がありますね。日本が作った海軍基地。朝鮮人民軍がそこを占領して釜山に行くと、馬山では戦う必要ないと。そう思ったみたいなんです。鎮海にはアメリカ海軍が入っていて、そこに船がたくさん入ったみたいですね。そこで、艦砲射撃ですか、それでもう人民軍が全滅しちゃうって、総崩れ。ですから、うちの郷里がね、まったく戦場になってしまったんです。

今西 村は焼けたんですか。

安 村はみんな、焼けてね。これは人民軍が焼いたもんじゃなくて、アメリカ軍が焼いた。それは何かとといいますと、アメリカ軍は人民軍が兵站を現地で確保するというに気付いたんです。焼けてしまったらもう、兵站がなくなるんですから。それは完全にアメリカ人がやった。

今西 その時は、だいたい死者は出たんですか。

安 いやいや、それがね、死者は出なかった。どうしてかといいますとね、晋州を閉めてしまってね、そこから韓国政府が、「人民がみんな、北朝鮮に取られちゃう」と、「これじゃ国が滅びる」と。だからみんな、その晋州の南からは疎開したんです。私もね、今の金海キメの進永ジニョンというところに疎開させられちゃって。人を居なくして、みんな空白にしておいて、もう火をつけてね。みんな燃やしてしまったんです。

今西 北も攻めてる間にどんどん兵站が燃やされて、兵站補給できなくなってる面もあったわけですね。

② 避難民時代と「近代」との出会い

今西 それがだいたい、中学生くらいですか。

安 私その時ね、中学校に入ったんじゃなくて、避難民になっちゃって。その

時は、中学校に入ってた人間もみんな避難民。私は当時、中学校に入ることもできなかったんです。避難民生活はね、約2ヶ月くらいだったですかね。2ヶ月くらい経ったらもう、人民軍が逃げちゃうでしょ。米軍の仁川上陸作戦でね。そこで陽暦の9月に、郷里に戻ったんです。みんな焼けちゃってね。家も何もない（笑）。食べ物もない。

今西 それは何か、その時に避難民キャンプみたいのを作ったんですか。

安 避難民キャンプもないんです。避難した時はね、避難民キャンプというよりは、金海の進永にある中学校がありましてね。だいたい避難民キャンプというのは学校でした。当時は学校で教えるとかそんなことできなかったんですから。教室に入ってね、もう、たくさんの人間が一つの教室でね、眠ったり、生活したり、そんなでした。

今西 当時、食べ物はアメリカ兵が持って来たんですか。韓国軍が持って来たんですか。

安 食べ物は、どうだったかな。うちから持っていったものも少しあったみたいでしてね、配給も少しあったんじゃないんですか。

今西 それは、韓国軍が配給してくれたんですか。

安 韓国政府でしょうね。配給も少しあって、アメリカ軍がね、何か、食べ物をたくさん作ってね、配ったり、そうしました。もう完全に当時、韓国人は韓国語でゴジ（物乞い、みじめな身上の意）だったんです。

今西 その時に初めてアメリカ兵をたくさん見たわけですね。

安 戦争の時からもう、どこにでもアメリカ人がいたね。その時ね、韓国戦争（朝鮮戦争）でアメリカの軍隊が韓国に入って韓国人の考え方だとか生活の様式だとか、これが「だだーん」と変わったと思います。

今西 アメリカ文化がすごく入ってくるでしょうね。

安 それは植民地期のそれとは全然違う。そこに、アメリカ人の兵器がたくさん入ってくるでしょ。私はもう腹が減って、郷里に帰ってもどうしようもないから、アメリカ軍隊が捨てた陣地に入るんです。陣地に入ったらね、アメリカ人は食べた後の残り物をみんな捨てるでしょ。それを拾って食べたん

ですね。もう食べるものがないんだから。

今西 米兵の残飯ってやつですね。

安 だいたいその人たちは缶詰だとかね。包装も、水に濡れないような、いい包装するでしょ。今、もう世界中みんなそのような包装ありますけど。戦前は、ほとんどなかったね。それを拾ってね。土が付いてるんだけど、洗って。きれいなものは食べることできたんですから。それを拾うためにね、アメリカの陣地にしょっちゅう通ったんですよ。私その時、小学校卒業してすぐだったんですよ。

そこでね、アメリカ軍が捨てた兵器と接することになった。どうしてかといいますとね、アメリカ人の陣地の周りは地雷がいっぱい埋めてあるんですよ。それを突破して陣地に入らなければならないでしょ。ですから、陣地に入ったら危ないっていうのは、みんなよく知ってましたけど、そこに入らないと食べ物がないんだから。私が先頭に立って、入ったんです。

当時ね、うちでは私を使ってね、悪いこといっぱいやったんですから。順番を割り込んでチケットもらうとかね。当時は物資が足りないですからみんな配給の列を作るでしょ。その時私が遣られてね、すぐパッと割り込むんです（笑）。（そういう意味では）よくできた人間だったんですけど、悪いことばかりやりました。今となっては、恥ずかしいんですけど。

今西 まあ生きるためですからね。

安 当時はね、そんなことすると、本当に褒められたりしました。だからそんな人間だったんですから、陣地にも君は入れるんじゃないか、と。その次ね、恐る恐る、地雷の線が「スーッ」と引いてあります。それを越えて入って、たくさん食べ物を取ってね、拾って、出て来て、みんなで一緒に食べたりもしたんです。そうしますとね、たまにね、それ爆発してね。注意が足りない人がいるでしょ。負傷したり、そうしますね。だからもう、うちの面だとか郡では怪我人がたくさん出ましてね。そこで私は考え出したんですよ。「地雷を無くしたらいいんじゃないか」と。それでね、地雷をよく勉強してますとね、色んな種類の地雷があるってことを知ったんです。照明弾だとかね。

照明弾というのは、これはもう、すぐ無くすことできるんですね。私がみんな無くしたんです。照明弾地雷を分解してみますとね、みんなネジで組み立てられているということを知ったんです。「これならみんな無くすことできる」と思ってね。そこで今度は、対人地雷に挑戦したんです。これを見えますとね、ネジ式でできてましてね。そこで、それを一つずつ拾ってね。そこに手を入れてね、力を入れて、これを分解してみた。

今西　すごい、下手したら爆発する（笑）。危ないですよ。

安　分解したらね、構造が分かったんです。地雷はね、地雷の頭に爆発装置が付いてまして、釘を止めている部品がワイヤーに結びついています。何かの力でそのワイヤーが引かれますと、バネに着いている釘が放たれて芯に当たって、爆発します。その釘の頭に小さい穴がありますので、ピンを入れたら、その釘が芯に至らずパッと止まるんです。安全装置です。それを知った。それで私が咸安郡でね、「地雷なら安^{ハマン}を呼べば、解決できる」と。そのくらい有名になっちゃって。実際に呼ばれたことはないんですけどね。

今西　今でも爆弾処理するのは大変な仕事ですからね、危ないです。

安　そんなこと自慢するためにね、私そんなこと言ったんじゃないくて、そこでね、私が文化的に非常に衝撃を受けた。アメリカ文化に。食べ物を拾って、食ってみてもそうだし。それに銃なんか、分解もできるしね。手榴弾もね、持ってても遊ぶことができるし。そこでね、私は完全にもう「近代的な少年」になってしまった。私その影響が大きいと思います。

今西　アメリカ文化への接点で、そういう接し方だったんですね。戦争を通してアメリカ文化に接するという。

安　機械文明が何かということ、そこで覚えちゃった。体験したんですね。

③ 中学校時代

安　それで1年後ね、中学校2年生として入学したんですけど。

今西　どこの中学に行かれたんですか。

安　郷里の、咸安中学校。2年生として入ったんですけどもね。どこからか偽

の証明書、取ってきてね。でなければ、2年生になれないでしょ。みんな、当時はそんなことができたんですから。

今西 2年生に入ったのはまだ戦争中ですか。もう戦争は終わってるんですか。
安 戦争中でしょうね。朝鮮戦争が勃発して、1年もしない頃に、中学校に入ったんですから。1年経ったか、経たなかったかな。そのくらいだった。

どうして1年生をとばして、2年生に入学できたかといいますとね、実はね、実力はあったんですよ。どうしてかといいますとね、その地雷整理のためにね、働いたんですよ。一緒に行った人がそこで失敗してね、亡くなってしまった。私一緒に行ったんですから、安の責任だと。そのように非難されるんですよ。それも当然だと思うんだけど。そこで落ちこんでね。「この人、戦地においておけば、きっと亡くなる」と。いつも兵器と一緒に遊んでますから。そこでね、釜山に、送られてしまったんです。うちの保護者たちがね、釜山の兄貴に言ってね、「そこで生活しなさい」と。「そうでもしないと君はきっと、死ぬよ」と。それで釜山に行って、兄貴と一緒に私、自炊生活してたんです。時間が余るでしょ。それで、放っておくと危ない人間だったんですから。兄貴がね、いつも難しい課題を設定するんです。「今日はこの書物。この何頁、何頁、数学のテスト、みんな受けてね。置いとくから。」と。英語ですと、「みんな覚えておきなさい」とかね。そこで、1年の間に兄貴から教育を受けて(笑)。中学校2年に入ったと思うんだけどね。入ってみても、もうついていくくらいの実力があったんです。

4.2 50年代中期(朝鮮戦争後)

高校時代

今西 じゃあ、朝鮮戦争が終わるのが、中学卒業するくらいですか。ちょうど53年ですが、その後、中学を卒業してまた高校に行かれるわけですね。

安 そうですね。高校に上がってね、朝鮮戦争が終わったと思うんですね。私が釜山工業高校に上がったんですけどね。

今西 そうですか。

安 ええ、咸安中学校から卒業して。そのときに釜山でね、スターリンが亡くなったというチラシが配られて。

今西 そうすると53年ですか。

安 その頃休戦になったでしょ。ですから釜山で、休戦を迎えたと思いますね。私がね、56年に、高校を卒業したんです。高校卒業して、ソウル大学に挑戦して、1回失敗したんです。

今西 工業高校に行かれたっていうのは、その頃はエンジニアになるつもりでいたんですか。

安 いや、その計画ではなかったんですね。当時、中学校通ってね、咸安にも咸安高等学校がありましたけどね。そこに進学するか釜山に行くか、と思っ
てね。結局、釜山に行かないとダメだ、ということになって、もう郷里にいてもお金がないんだから、お兄さんのところに行く方がいいんじゃないか、
と思って釜山に挑戦した。その時、二つの理由があって、釜山工業高校に挑戦したんですけどね。一つは何かというと、当時の釜山高校というのはね、
慶南キョンナム高校と並んで、釜山でレベルが高い高校だったんですけど、そこに挑戦したら失敗する可能性があるくらいの成績しかなかったんです。もう一つは、その当時ね、入学するためには、入学願書がないとダメでしょ。偶然それがあつたのが、釜山工業高校のものでして。それで釜山工業高等学校の機械学科に入っちゃったんです。エンジニアになるために入ったんじゃなくて、偶然だったんです。

今西 そうですか。でも理数系は好きだったわけでしょう。地雷を解体するくらいの能力があったわけだから（笑）。

安 私は実はね、工学だとかね、数学だとか嫌いだったんでしてね。だけどね、成績を見ますとね、いつも数学はいいんです。

今西 それはいいですね（笑）。嫌いでも成績がいいのは。

安 機械関係ね、それが好きな人間だけど、でも、いつも歴史だとか文学だとかね、そんな思考だったんでしてね。

今西 その頃は、歴史とか文学とかどんなものを読まれました？高校時代の本

とかは。

安 あんまり読んだことはないんです。

今西 文学とかはいかがですか。

安 文学はね、やっぱり朝鮮人文学者として韓龍雲（1879～1944年。僧侶，詩人，独立運動家などとしても知られる）だとか色んな人がいるんですけど，小学校の高学年からね，それはしよっちゅう読んでましてね。元々私は，国語国文学科に進学しようと思っていたんです。だけどうちが貧しいもんですから「君ね，うちはお金もないし，大学に通うことも難しいんだ。だから大学を卒業して，うちを経済的に支えるべきじゃないか」と。「だから商学科に進学しなさい」と言われて，ソウル大学商学部に挑戦して，受かったんです。最初は失敗して，2回目に受かったんです。

今西 それで，ソウルへ行かれるわけですね。

安 当時ソウルにはね，お兄さんが2人，高麗大学に進学して，1人が三星の社員に既に入っていましたから。お兄さんについてソウルに進学したんです。

今西 けどまだ，朝鮮戦争の焼け跡とかあって，ソウルといっても当時はまだ貧しい時代だったでしょ。市庁舎も燃えて。

安 どうだったんですかね。

4.3 50年代後期（李承晩政権期）

大学時代と原書講読

今西 先生のソウル大生時代のことをききたいんですけど，ソウル大学へ50年代後半に入られるわけですね。

安 ソウル大学に入るのは，57年です。56年に高校卒業してその前に1度失敗したんですけど。

今西 1回浪人して，それから一浪して57年に入られたわけですね。

安 入りますとね，教科書がないんですよ。だから，アメリカの教科書を使っただけですね。ですから，ポール・サミュエルソンのね。

今西 サミュエルソンの『経済学』（原題：*Economics: An Introductory*

Analysis, 1948年。邦訳としては、都留重人訳『経済学』上・下（第13版）岩波書店、1992年ほか）ですか。

安 『経済学入門』というのがありまして、それで勉強したんですけど。実はね、私の英語力はそれを読んでね、消化できるレベルじゃないんです。英語の勉強としてやったんですね。だからね、教科書というのはそんなもんだと。もちろん韓国語で書かれた教科書もあったんですよ。けどもう、何かね、論理もないし、統計学の教科書もあったんですけどね。数学というのは、非常に論理的でしてね。数学の公式には、未知数だとかね、色んな変数だとか色々あるでしょ。それ1文字でも誤植があったらもう、解けないでしょ。数学というのは。

今西 数学の教科書に誤植があったら解けない（笑）。

安 そんな教科書もって我々、勉強したんですから。我々の同級生の中では冗談でこう言ってるんですけど、「我々は天才ですよ。こんなみじめな教科書で勉強して分かっちゃったんですから」と（笑）。なんとかそれを読んだんですけど、やっぱりアメリカの教科書が影響力あったんですね。英語よく分からないんだけど何年か読んでみますとね、少しは分かるでしょ。それと前に私申し上げた通り、（元々は）国語国文学科志望だったんですから。学部の時、経済学の勉強したんですけど、実はね、それよりはね、小説だとか英語の小説だとか、そんなもの読んだんです。

今西 どんなもの読まれたんですか。

安 （アーネスト・M）ヘミングウェイの小説だとかね。そんなものも読むんだとか。そうじゃなく経済学ですとアダム・スミスの『国富論』（原題：*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776年。邦訳としては、玉野井芳郎、田添京二、大河内暁男訳『国富論』1～4、中央公論新社、2010年ほか）を原書で読んでみるんだとかね。（ジョン・メイナード・）ケインズの『一般理論』（=『雇用・利子 および貨幣の一般理論』。原題：*The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936年。邦訳としては、間宮陽介訳『雇用、利子および貨幣の一般理論』（上・下）

岩波書店、2012年ほか)も原書で読んでみるんだとかね。だけど分かるはずがないんでしょ。なんとか目を通してるんだけど。朝から午後までずっと図書館にいたということは間違いはないんだけど、何を覚えているかというのは分からない。そんなものでした。

今西 マルクス主義のものも読まれたんでしょ。その頃は読んでないんですか。もっと後ですか。

安 学部の時は何も、読まなかったんですけども。学部の時、私、病気だったんですから、1年留年したんです。脊椎結核(=脊椎カリエス。結核性脊椎炎とも呼ばれる。脊椎に結核菌が感染することによっておこる脊椎炎)だったんです。脊椎に、骨にね、結核菌が入りました。それで大学2年の時ね、手術を受けたんです。そんな関係もあって、病院に入っても、『プライド・アンド・プレジューティス』(原題:*Pride and Prejudice*, 1813年。邦題では『高慢と偏見』)という、そんな小説もあります。有名な英国人の小説家、ジェーン・オースティンですかね。名著なんです。それが何かといいますと、クラシックイングリッシュから現代イングリッシュに変わる時期の。だから文章が非常に難しいですよ。だけど分からなくても読むんです(笑)。それでね、何も分からないのに、(ウィリアム・)シェークスピアにも挑戦してみたりね。後からね。だけど、シェークスピアはもう参っちゃった。何度読んででも分からない(笑)。だから失敗しちゃった。

今西 シェークスピアの英語は難しいですよ。

安 当時の韓国での勉強というのは何も秩序がなかったんですね。だからもう、場当たりの勉強したんです。これがあればこれで勉強するんだとかね。体系的な勉強だとかそんなの、ほとんどなかった。

今西 本があったら読む、そっちの方が先なんですネ。

5. 60年代以降の話

5.1 60年代の学生運動と社会主義理論について

安 マルクス主義の勉強はどうやってやったかといいますと、4年生の時、1年留年したんです。「4・19」,その学生運動（「4月革命」／「4・19革命」：1960年の不正選挙に反発した学生らによる抗議デモ。これにより李承晩を下野させた）があって。

今西 李承晩打倒という。

安 私はあそこ参加したんです。ですから、^{ソンプク ジョンアムドン}城北区鐘岩洞のソウル大学商学部から2、3kmほど離れた^{クワンファムン}光化門（1394年に王宮である景福宮の正門として建設。ソウル市鍾路区に位置）まで、市内を歩いてデモ行進。今のソウル市の議事堂とかあるんでしょ。その前で座り込みをしたんです、私もね。そこでデモしていますとね、^{チョンワデ}今の青瓦台（韓国の大統領官邸）から銃の音が「バババッ！」と聞こえてくるんです。警察官が学生に向かって発砲したんです。我らも、青瓦台に向かって進行したらどうかという話もあったんですけどみんな臆病だったんですから、「いや、危ないですよ」と言ってそこに行かないで、^{ジョンドン}貞洞という法院（裁判所）の前に行って抗議したり。そうやったんですけどね。そうですから、4・19運動がね、私に非常に強い影響を及ぼしてしまいました。その前まで私は、高等試験受けて、官吏になろうかと思ったんですけど、そこで、やめたんです。そこで「国というのが何か」と。「政治というのが何か」と。そんなこと考えるようになりました、そこからね。

今西 具体的な学生組織とか、共産党とか政治組織とかそういうものはあったんですか。

安 いや、その時そういうことについて、政治意識ができたんです。その前までは政治意識はあんまりなかったんです。

今西 ノンポリ学生っていうやつですね。

安 ええ。政治意識ができちゃって、そこで、「国が今抱えている問題が何か」と。「韓国近代社会が志向すべき道はどんなものか」と。もうそんなところ

にずっと関心があつて。大学院に進学して、もうちょっとゆっくり勉強すべきだと。そう思って、大学院に進学したんです。

今西 マルクス主義っていうのは、どういうマルクス主義が強かったんですか。
安 大学院に進学して何を専門にしようかと思った時、現代韓国の課題を知るためには、歴史をやらなくちゃならない、と思って韓国近代史をやろうと。そこでね、近代史をやるんでしたら、日本人が残した書物を読まないダメ。そこで私が前に申し上げた通り、十日ぐらい日本語勉強したらもう、日本語スラスラ出てきて。図書館に入ってみますとね、半分以上は日本語の書物だったんでしてね。その前まではそんなこと知らなかった。それ以降、図書館に入ってみますとね、3分の2くらいはみんな日本語であると。それと日帝時代を勉強するためには日本語分からなくちゃダメだと。それで日本語覚えたんです。日本語覚えて学生運動と同時にね、4・19以降、学生運動活発だったんですから。いつもね、「学生運動の課題が何か」と。もう大学院生だったんですから、それに気がつくんですね。そうですから、社会運動についても目覚めてしまって。社会運動をどのようにやるべきかというところをマルクス主義でいったんです。運動理論ですから。そこからマルクス理論を、勉強するようになりました。それと私の先輩の中の1人にね、組織運動をやっている人がいました。その人は朝鮮戦争以前に「南労党」(南朝鮮労働党の略称。北朝鮮労働党結成の後、1946年に結成された共産主義政党。1949年解散)の党員で、1964年頃には「人革党」(人民革命党)を組織した人で、マルクス主義者だったんです。その人から教えてもらって、マルクス主義の書物が図書館にあるかどうかを調べてみますと、いっぱいありましたね。

今西 京城帝大時代からのものがたくさんあるわけですからね。

安 その時までにはね、反共主義は強かったんですけどね、図書館にそんな書物がたくさんあるということ、誰も知らなかったわけね。私が図書館に入って調べてみますと、いっぱいある。

今西 戦前のマルクス主義の本を、日本からいっぱい買ってるわけですから。京城帝大の時代からね。

安 英語版もあって『マルクス＝エンゲルス全集』ってのもたくさんありますね。改造社版でしたかね。全集だけじゃなくて、色んなものがありました。

今西 マルクスの現物を読むことから始まったんですか。マルクスの『共産党宣言』（邦訳：村田陽一訳、大月書店、2009年ほか。原題：The Communist Manifesto, 1848年）とか、最初はそういうのから読まれたんですか。

安 日本語に翻訳されているものだったらね。（それと）英語で翻訳されているものだったら読んだんです。主に日本語だったんですけど。学部（時代）は近代経済学ですね。サミュエルソンだとかね。

今西 マクロ経済学の理論ですね。明らかにね。

安 やっぱり、マルクスの『資本論』（原題：Capital: Critique of Political Economy, 1867, 85, 94年）とか直接読んだんです。読んでどれくらい分かったかとか、全然私も分からないんですけど、なんとか読んだんです。

今西 読書会なんかはあったんですか。社会科学研究会とか、何かそういうクラブとかあったんですか。

安 いえ、なかったでしたね。私の弟子たちを教えるために、そういう書物をもって読書会をやるとか、そんなことはありましたけども、同期たちと一緒に読んだことはないです。

今西 じゃあ独学なんですね。

安 完全に独学なんですね。そこで運動をやってるんですから、経済学だけじゃダメなんですよ。歴史だとか哲学だとかね。レーニンの書物だとかね、分からないうちに、場当たりに読んで。

今西 ^{マオツォードン}毛沢東はどうだったんですか。影響されたことはあるんですか。

安 それはずいぶん後でしたね。そこで「韓国近代史の課題が何か」、ということ認識するためにね、ずっと悩んだんです。マルクス主義の理論だとか、資本主義理論を読んでみても、これはもう資本主義一般の課題でした。 「植民地が抱えている課題が何か」ということ。「低開発国が抱えている課題が何か」ということ。それを教えてくれなかったんです。それを、勉強するために、韓国近代の有名な人たちが、自分の歴史的課題をどのように認

識しているかということをお勉強するために、韓龍雲とかね。有名な詩人なんですけどね。申采浩^{シンチェホ}（1880～1936年。思想家、歴史家。独立運動家としてよく知られる）という人もいますよ。その人たちの全集を、読んだんです。それ読んでみますとね、韓国近代史の課題が何かということをよくしゃべってはいるんだけど、理論的にはほとんど整理されていない。私マルクス主義理論、ちゃんと読んでいましたから。比較してみますと、これではダメだと。これはまだ近代的な理論になっていないということ、分かっちゃったんですから。そこでね、日本で52年に翻訳された『毛沢東選集』（毛沢東選集刊行会、三一書房）というのがありますね。5巻だったんですかね。それが偶然に手に入っちゃったんです。それがね、70年代だったか、いつの頃か分からないんだけど。それも読んでみますとね、私が求めているもの、みんな説明されてた。

今西 民族主義、民族解放理論ですね。

安 そう。ですからこれが階級理論と民族理論を統合して、一つの理論を作っていましたから。私がそれを読んでね、それよりはちょっと時期が早かったかもしれないけど、60年代後半期かもしれないけども、私はね、韓国学生運動の理論家になっちゃったんです。

今西 先生は『三・一運動』（韓国日報社、1975年）という本も書いておられますよね。

安 ええ、それを出した時はまさしく、私はそんなの读みたい読んでました。それ75年に出したんですから。実際その中では理論は一切ないんだけど、どうしてかといいますと理論を入れると…。

今西 警察に捕まりますね（笑）。

安 そうされますから。民族主義者みたいに偽装してね。

今西 反共法（共産主義団体への加入および勧誘、共産主義賛美、便宜提供などを行った者を罰する治安立法として1961年制定。80年廃止）にひっかかりますね。

安 階級理論もたくさん取り入れて説明したんですけど、毛沢東理論は熱心に

読みましたね。読んで私、日帝時代は植民地半封建社会だという、後で考えてみたらでたらめな理論を打ち出したり。

今西 当時はそうですね。

安 ええ、そうでした。それはもう北朝鮮の影響もあります。そこには。北朝鮮もそういうの持ってまして。

今西 もちろん、北の歴史はそうですね。その頃は北朝鮮の本もこっそり読めたんですか。

安 ええ、実は韓国でそんなことはみんな禁止だったんですけどね。「君どこからそんなもの手に入れたか」と。それは私の性格ですかね。色んな人と交渉してね、なんとかそれを日本から、コピーしてね。学者ですと、外国からいくつかの書物を持って来ても許されるでしょ。そんなもの持ってきた人たちがだいたい私にね、読んでくださいと。北朝鮮の歴史科学だとかなんとか、それも当時けっこう読んだんです。

今西 当時はソ連の本も読まれたんですか。科学アカデミー（ソ連における最高学術機関。西欧の科学技術や芸術の分野に追いつくために構想された。1925年にソ連科学アカデミーに改称）とか。

安 哲学教程だとかね、経済学教程とか。日本語に翻訳されたものね。

今西 『経済学教科書』（第1～4分冊。ソ連邦科学アカデミー経済学研究所著、経済学教科書刊行委員会訳、新日本出版社、1963～64年）とかね。

安 その頃あるでしょ。それがだいたい手に入っちゃったんですから、よく読んでんじやって。

今西 欧米の理論の影響は受けなかったんですか。例えば「ドップ・スウィージー論争」（ドップの『資本主義発展の研究』（1946年）にスウィージーが批判を加え、1950年以降アメリカの*Science and Society*誌上で展開された論争。封建制から資本主義への移行に関するいくつかの基本的な論点、主に封建制を解体させる起動力が外来的なものか、内部的なものかを巡って展開された。「移行論争」）とかいう形で。

安 それ読みました。経済学の中でも経済史ですから。そうですからモーリス・

ドップだとか、ポール・スウィージーだとかね。大塚久雄だとか、高橋幸八郎だとか。そういうの、しょっちゅう、取り入れて。

5.2 69年の東京大学留学時代と高橋幸八郎先生

今西 高橋幸八郎先生はそもそも戦前、京城帝国大学の先生だったんですよね。

安 それもあるしね。私、69年に、早稲田で1年留学したんです。そのときね、実際は、高橋幸八郎先生にお会いするために行ったんですけども。当時はね、アメリカの燕京^{イェンチン}（燕京研究所、ハーバード大学所在）、あそこから奨学金をもらって、日本に留学したんです。籍は早稲田においたんですけども、途中、東京大学に行きました。高橋幸八郎先生、社研（東京大学社会科学研究所）にいらしたんですよ。

今西 社研の所長ですね。

安 そう、高橋先生と関係してましてね。

今西 高橋先生は、何か植民地時代の思い出、語っておられましたか？

安 いえいえ。

今西 あんまり語っておられないですか。

安 高橋先生がね、京城帝国大学におられた、ということは分かってたんですけど、それよりは、「ドップ・スウィージー論争」と、高橋先生が関わったんですから。

今西 そうそう、英語論文を書いておられますからね。

安 高橋先生にお会いしに行って、勉強したらできるかな、と思ってね。実はね、6ヶ月くらいね、高橋先生に週に1回ずつ訪ねて行ってたんです。いつもね、「土曜の午後に来てください」と。今覚えてないんだけど、多分、2時くらいじゃないかな。訪ねて行ったらね、いつも高橋先生の研究室にはね、濁酒^{どぶろく}がいっぱいあります。いつも、訪ねて行ったら、勉強の方はほとんど、関わらない。濁酒ね、一緒に飲むんですよ。身の回りの話だとかね、そんな話ばかりでしてね。当時私ハーバード燕京のお金もらってたんですから、ずいぶんお金あったんですよ。当時の日本は貧しかったんですから。69年だっ

たんでしてね。私その時、月に225ドルもらったんです。その時ね、1ドルが360円だったんですから。金持ちだったんです。

今西 変動相場制の前ですから。

安 私そのお金をね、韓国の貧乏な学生たちに配ったんです。そのくらいのお金だったんでしてね。ですから、高橋先生と一緒にお酒飲むこともできるくらいのお金だったんですけどね。だけどね、高橋先生ね、面白いところはどこかといいますとね、午後と一緒に酒飲むでしょ。2時から5時まで飲んだらフラフラしますから。一ヶ所で飲んでも面白くないんだから、「一緒に出かけましょう」と言うんです。高橋先生と一緒に出掛けたらね、夜の8時から9時までね、店を何ヶ所か移動するんですよ。そこで私が「先生、私が払いますよ」と言ったら、絶対許さないんです。「君、こんなことするなら、ついてこなくていい」と。

今西 昔の先生はみんなそうですね。

安 高橋先生は、まったく戦前の人間でしてね、近代的なところは私よりもちょっと遅れてるんじゃないかという感じでして。どうしてかといいますと、当時の「本郷通り」ね、車が速いです。80キロとか100キロだとかで走りますよ。信号があるでしょ。ですから「先生、信号で渡りましょう」と言ったら、「君は、ついてこなくていいから」と。堂々と道を渡る。だけど私、一緒に渡らなくちゃダメでしょ。

今西 危ない（笑）。いや、あの頃はみんなそうですね。私の先生たちも。

安 私、高橋先生がね、1回も信号を守ったところ見たことない。

今西 大石嘉一郎さんとかね。私の先生の古屋哲夫さんとかもそうでした。

安 大石さんもしょっちゅうお会いしたんですけど。大石さんとはね、私が85年に東京大学経済学部に行った時にお会いしたんです。

今西 大石さんもすぐ飛び出して行くし（笑）。それはもうみなさん交通信号守らないんです。

安 夜9時から10時になりますと、1時くらいまで飲んだかな。やっぱり車、バスだとかね、電車も切れて、ないんですよ。そうしますとタクシーを拾って

私、高橋先生のお宅まで行って、私はそのタクシーで家まで戻ってくるんです。私がお金出すのは、タクシー代だけなんです。

今西 昔の先生はみんなそうですよ。高橋先生は、だけど何か、京城時代のことしゃべっておられたことがありますか。

安 いえ、ほとんどしゃべらなかったですね。京城大学におられた時のこと、勉強については何にもしゃべられなかった。^{トンデムン}東大門の外側で、^{シンソルドン}新設洞というところでね、「濁酒を飲んでどのように楽しんだか」と。そんなことばかり！

今西 高橋幸八郎先生が、ああいう土地制度改革に関心を持ったのは、朝鮮の改革なんかの影響があるんじゃないかという気がしてるんですけどね。ああいうフランスの土地制度を研究したこととの関係が気になります。

安 いや、高橋先生が私に教えたのはただ一つ。「君、民族資本とは何か分かるか」と。(私は)「分かりません」って。「民族資本というのは産業資本なんだよ」って。私が覚えているのはそれしか。それ以外はみんなもう、人間関係について話したり、そうやってね。学問については話を聞けなかった。私があそこで失敗した、私が学者としては失敗したな、と思うのは、その時、高橋先生が私にこんなこと提案したんです。「君、もうちょっと日本に留学して、勉強しないか」と。そのとき私がもし「はい、ありがとうございます。先生の下で勉強したい」と、そう言っていたら、私も「資格がある」研究者になったかもしれませんけどもね。

今西 いや、今でも十分資格のある研究者です(笑)。

安 で、そのときに「国に帰ります」と、言ってしまっただけ。実は私は正式に、学者として、訓練を受けたこと一回もない。私の考えで、必死にできるところまでやってきた。これがね、学者としても、よくできていない人間として失敗したんじゃないかな、と思って。

5.3 70年代のソウル大学教員時代と学生運動

今西 最初そういう民族主義の影響を受けて、だけどその後、その民族主義を否定されるようになったわけですよ。そういう民族主義って考え方は間違

いだと、かなり批判をされるようになってくるわけでしょ。

安 私の考えが変わったのは、70年代いっぱいまではマルクス主義者として、学生運動の理論家として頑張ったんです。そこで、運動組織にも入って、なんとか頑張ったんです。いつもね、「韓国現代史の課題は何か」と。そこから、関心が離れたことはなかったんですね。どうしてかといいますと、約3、40名くらいのソウル大学の学生たちは、みんな労働運動に出てしまったんですから。私が教育してね。その人たちの責任を取らないとならないんでしょ。その問題ばかり考えて。大学の教員として、彼らが飯を食えないとダメだから、それやったんだけど、だから本職はそれじゃなくて、運動だった。だから体系的な研究というよりも、「運動の理論をどのように提供するか」と。だから私は一つの研究の題目で落ち着いたことできなかった。研究者ならいつも、色んなもの読まなくちゃダメなんでしょ。だから、読むのは読むんだけどね、私の理論が一つの分野を開いてね、研究するということがほとんどできなかったのはそこなんです。私、研究者としての資格を持つことはできなかったんです。まあ勉強はするんだけどね。

それですと研究して、私なりに勉強してきたんだけど、79年にね、私が、^{パク チョンヒ}朴（正熙）大統領が亡くなるということを目撃したんです。運動を中心にやってみますとね、政治の動きを、動きがあるごとに敏感に、判定しなければならぬ。認識しなければダメですから。79年に入ってね、朴大統領の話がね、混乱するんです。朴大統領、「もう長持ちしない」と、分かる。我々としてはね、79年の8月くらいに、そんな判断をしたんです。「朴大統領亡くなったら、韓国の資本主義は崩れる。社会主義に転換する」と。それがね、当たったんですよ！ どうして当たったか分からないんだけど。10月26日（1979年）に、暗殺されたんでしょ。あそこでね、「我らが正しかった」と。「もうこれから社会主義革命が起こるはずだ」と。だけどちょうどその頃ね、組織が潰れちゃったんです。私が所属していた組織。その時ちょうど朴大統領亡くなって、民主化の時代になったんですけど、その前に、「南民戦」という組織が捕まった。その組織のメンバーの二人が元々我々の組織にいた人だった。

今西 「南民戦事件」(1979年10月9日から11月3日にかけて南民戦の主要メンバーが国家保安法、反共法違反の容疑で公安機関により摘発される)ですね。

安 その組織の人間が我らの組織の存在をね、報告してしまった。こっちも50名ぐらいになる組織だったんですけど、それをみんなもう、諜報機関に報告されちゃってしまっただけです。それでみんな調査、逮捕されちゃったんです。

今西 名前はついてたんですか、その50人の組織っていうのは。

安 名前はないね。どうしてかっていうと、我らがね、どれくらい敏感だったかといいますと、「名前を作ったらきっと殺される」と。「絶対名前は作らない」と。1回でね、絶対覚えるべきでしてね。書き置いたらダメだと。

今西 記録を残さないよ。

安 (組織規則の)3番目はね、一緒に会う時、3人以上で絶対会わないこと。3人になりますとね、組織というのは、証明されるんだから。

今西 そうですね。非合法闘争の原則ですよ。

安 どうしてかと。命をかけてやってるんだから。これはね、絶対危ないんだから。だけど、組織が発見されて調査されてもね、何も証拠がない。組織があるということは分かる。どうしてかといいますと、50人のうち40人がね、労働運動をやってね。ソウル大学卒業、一流大学卒業者がね、あるいは卒業もしないで、労働現場にみんな入っちゃってんだから。だけど、何もない。名前もないし、書いたものもないし。向こう(当局側)にも、組織がみんなばれたんです。だけど、それ彼らが作った(把握していた)組織でして、こっちで書いてあった(名前を付与した)組織じゃないんです。

だけでも、朴大統領が倒されてしまったんですから、民主化時期(朴正熙暗殺後、同年12月29日に全斗煥チョンドッファンなどの新軍部勢力による肅軍クーデターが断行されるまでの時期。「ソウルの春」)になったんでしょ。だから無理に調査できない。私が組織委員であるというのは、ばれたんですけどもね、私を逮捕することもできない。どうしてかといいますとね、大学教授を無理に扱ったら、自分が困るでしょ。私、一回も調査されたことがない。その前までは

ね、ずいぶん、警察に連れていかれて、拷問されたりしてたんですけど。その時はちょうど、全斗煥が実権を握る前だったんですから。

今西 ^{クワンジュ} 光州事件（1980年5月18～27日。民主化を求める学生や市民が韓国軍と衝突し、多数の死傷者を出した事件。「5・18光州民主化運動」の前ですね。

安 ええ。だからね、その人たちはみんな、警察で、処罰されるといったんですけども、検察庁ですか、そこに行ってみんな否定したんですから。それで、裁判にかけることさえ、できなかった。2人を除いて。2人は何か、証拠があったから。それ以外はみんな釈放された。それで組織は解散した。

5.4 80年代の東京大学教員時代と思想的転換点

今西 その頃から、そういう民族闘争の評価について、先生の考えが少し変わってきたんですか。

安 いや、それでね、まず組織から解放されたんでしょ。組織の中にいる時は組織人として、メンバーとして考えなければダメだけど、そこから解放された。それと全斗煥が実権をとって、独裁やってるのに、韓国経済が復活してくると。これがね、ショックだった。

それと私ね、81年から「東京大学に来て教えないか」と、提案をもらったんです。だけどその時、全斗煥によって大学教授62名が大学から追い出されたんです。みんな私の民主化運動の同僚ですから。私だけ日本に留学したら、裏切り者になっちゃう。だから「行けません」と。その後同僚たちがね、84年秋学期からみんな大学に復帰したんです。そこで、同僚たちと相談して「君たちみんな復帰したんだから、日本に留学してもいいか」と。（すると同僚は）「いや、君、苦労したね」（と言ってくれた）。実はその4年間非常に苦労しました。私は大学から追い出されなかったんですけど、その人たちみんな追い出された。それに大学からお金が払われなかったんです。（それで同僚が）「君ね、4年間も苦労したんだから、留学しなさい」と。それで85年3月から、東大に行ったんです。

今西 東大はどこ行かれたんですか。大石嘉一郎さんのところですか、石井寛治さんのところですか。

安 石井さんが受け入れ教授だったんでしてね。実はそれを紹介してくれた人は、石井さんよりは2、3年先輩ですけど、中西洋さん。中西さんに紹介してもらったんだけど、専門は労働経済学でしょ。私は経済史ですから、石井さんに頼んだみたいです。そこで石井さんが受け入れ教授になって。

今西 まあ、石井さんは紳士ですね。クリスチャンで。大酒飲みではないですよね（笑）。

安 日本に行ってね、石井さんとお会いして、ちょっと生活してみますとね、いや、これは日本近代が作った、一番の最高傑作だと分かりました。すごいもんね。だから、こういう考え方、合ってるか分らないんだけど、やっぱり大塚（久雄）文化が作ったね、最高傑作は、石井さん。今でも私その考え、変わらないんだけど。いや、石井さんね、日本人は日本人だけど、日本人という感じがほとんどないね。「人間」という感じ。日本人は日本人みたいところが、においがあるんでしょ。その人にはそんなにおいがない。「ああこの人、人間だな」、って感じ。

東京大学ではね、社会主義諸国からいっぱい、留学してる学者だとか、学生がいたんでしょ。ゼミ、しょっちゅう入って見たんですよ。社会主義諸国はどうかと。（そうしたら）全部、自分の国の批判ばかり！そこでは中国の社会科学院（1977年設立。中華人民共和国の哲学及び社会科学研究所の最高学術機構）だとか、ソ連の社会科学院だとか、そこから来てる人たくさんいたんです。討論してみますとね、マルクス理論が分からない。

今西 マルクスを勉強してないでしょうね。

安 がっかりした。私は独裁の国でね、思想的に禁止されて、それを勉強するのに、それらの国々では書物がいっぱいでしょ。どうして勉強しないのか。そこで、よくよく考えてみるとね、分かった。どうしてか。社会主義諸国で知識人は、マルクス主義理論をよく分かってない、ということが分かっちゃったんです。（理論を知ってしまったら）反論するでしょ、権力者に。いや、

これはね、独裁というのは社会主義独裁も資本主義独裁も同じじゃないかと。そこでもう、「社会主義、ダメだ」って。そんな考えをもってね、1年東京大学で、講義するというよりは私、勉強のために行ったんですけど、そんな経験があったんですね。それで「社会主義はダメだな」って思ったんです。韓国に住んでいた時、「朴大統領が亡くなったら韓国経済はダメになる」って考えてたのに、そうじゃなくて意外にね、韓国経済が復活してびっくりした。

5.5 中村哲先生の話

安 それとこの時、京都大学に行って中村哲さんにお会いして。中村さんも、ショッキングなこと言うんです。「安さん、社会主義の時代はもう終わった」って。「これからは資本主義の時代になるから」って。「あなたの国も、韓国経済は資本主義並みになってしまう。(その)波に乗ってる国ですよ」と。そんなことおっしゃってて（笑）。

私は、中村さんの影響もあって、結局マルクスと毛沢東の理論に対して疑問を持つようになりました。マルクス理論は弁証法をその論理的な基礎としています。弁証法は運動の論理なんですけれども、果たしてそれが論理学として成り立っているかどうかという疑問です。物事が運動しますと、時間の変化によって理論とその上に立っている前提条件がどんどん変わりますよね。言い換えれば、激しく変わり続ける条件のもとで、果たして首尾一貫した理論が作られるかどうかという疑問があります。また、毛沢東には半植民地半封建社会という理論があります。そこには、基本矛盾として階級矛盾と民族矛盾があって、情勢によって階級矛盾が主要矛盾になったり、民族矛盾が主要矛盾になったりしますよね。半植民地半封建社会論の中では異質な二つの矛盾が第三の矛盾にアウフヘーベンされていない。だから、半植民地半封建社会論の中では二つの異質な矛盾がそのまま同居している訳です。毛沢東は半植民地半封建社会を、帝国主義国によって支配されている低開発国の「社会的性格」だといっていますが、「社会的性格」というのが科学的概

念になりうるかどうかについても問題がありそうです。

今西 弁証法ってのは、矛盾がないとダメですもんね。

安 そうですね。矛盾は運動の中で展開されるんですから、時間によって前提が激しく変わってしまったら、首尾一貫した論理展開は難しくなります。

今西 でも中村さんのマルクス主義もずいぶん変わったんですよ。

安 いや、中村さんのマルクス主義ってのはね、ものすごい。彼の弁証法は形式論理を踏まえているのではないですかね。だから、いや私よく分からないんだけど、中村さん、マルクス理論としては、世界で一番じゃないんでしょうか。すごい。

今西 議論する時にいつも実証を片っぽに置きますからね。それと平凡な事実から非常に非凡な結論を見出すことができるから。やっぱり、ああいう能力はすごいですね。

安 そんなことがあって、中村さんにお会いしてみますとね、すごいことしゃべってるんじゃないかと。当時ね、ニクス（NICs：新興工業諸国）が世界資本主義の第3次波動の波に立っていると、はっきりそのように言っていた人、二人しかいなかった。中村さんと、森田桐郎。森田桐郎というのは、東京大学にいらっしまったんです。私と一緒に。

今西 森田さんも若い頃は京大の学生運動の活動家だったんですけどね、マルクス主義者ですね。

安 そのように考えていくうちに、だんだん考え方が変わっちゃってね。「自由というのはどんな意味か」と。「平等というのはどんな意味か」と。そんなこと私、考えるようになりました。

今西 でも、早いんですよね。民族主義を批判されてからね。そうやって自ら考え直して、世界の中で韓国を見直すという。

安 いや、考えてみますとね、自由と一緒に外側から入ってきたのがグローバリズムなんですよ。これもう、グローバリズムは民族主義とは反対。相対的に自分の国のために、愛国心ですか。それはもう相対的な愛国心は今でも必要だと。それはね、愛国心のためにじゃなくて、自分が所属している共同

体を大事にすると。そのくらいは、国じゃなくても、必要だと思いますよ。自分の住んでる村とか、これを愛する。当然じゃないですか。自分のね、隣の人間を愛するということですから。

その意味でしたら、私は民族主義というのも分かるけど、それ以上じゃないということね。それよりはやっぱり、世界の間人というものはもっと正しいんじゃないかと。そのように考えるようになりました（笑）。それはもう韓国がね、今のように繁栄するというのはね、これは絶対ね、世界人類に対してありがたく考えなければダメだと思いますね。ええ。そんなこと（笑）。

（本研究は、科学研究費一般研究(A)課題JP25244030「帝国日本の移動と動員」
（研究代表者今西一）の成果の一部である。）